

1月29日(金)、第60回附属幼稚園研究大会を開催しました。県内・県外(広島、徳島、愛媛県など)から約250名の参会者をお招きし、盛会裏に終えることができました。参会者の先生方、来賓の方々、松韻会の方々に深く感謝しております。

今年度は～つながる～をテーマに1年次の研究実践を発信しました。今回は、シンポジウムを行い、参会者の先生方とともに子どもの体験について、話合いの場を設けました。提案事例をもとに活発なご意見が交わされ、保育の振り返りの大切さを実感する。機会となりました。

《日程・内容》

9:30～10:20 開会式・全体会・研究経過報告

10:30～12:30 シンポジウム
協議会・パネリスト討議

13:30～14:00 ポスターセッション
「あおぐみしんぶん」の取組等

14:10～15:40 講演
北海道大学大学院教育学研究院
准教授 川田 学 先生

「出来事をもとにつくる保育
～どの子どもテーマをもって生きている～」

1. 研究テーマについて

(1) 設定の理由

平成23年度より「幼児教育の質を高める計画と実践の在り方を考える」をテーマに、一人一人の主体性と協同性を發揮できる生活ととらえ、その生活をつくるために、教育課程と指導計画の編成を行ってきました。その過程で、遊びを通して子どもがどのような体験の中、心を動かしているのか、何を感じ考え、学んでいるのかについて、さらに追究していきたいと考えました。一人一人の体験、一つ一つの体験の意味について丁寧に探ること、そして、それらのつながりを見取っていくことが、主体性と協同性を發揮する子どもの生活を充実させていくことにつながると考えました。

(2) 研究の目的・内容・方法

目的 子どもが充実した生活づくりを行っていくために、「体験」をどのように見取っていくかについて、個々の記録、事例研究での保育カンファレンスを大切に行う。その中で、多様な見方・考え方から見つめ直し、体験の意味を探ることを目的とする。

内容 ○子どもが遊びの中で体験していることをていねいに読み取り、どのような体験かを探る。

○一人一人の体験に目を向けた教師の援助について探る。

方法 写真やエピソードを取り入れた保育記録をもとに、次の観点から、体験を見取りました。

①子ども・遊びの理解 ②教師自身の振り返り ③次の保育への見通し(環境・援助等)

一書くことで保育を紡ぐー

～保育日誌～

子ども、遊び、自分を見つめる記録づくりになるように努めている。書くことで教師自身が明日の保育を楽しみになってくる。そのような心もちで書く記録の積み重ねを大切にしている。



また、事例を通して、保育カンファレンス(意見交流)を行い、いろいろな見方・考えのもとで、理解を深められるようにしていきました。

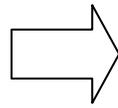
2. 研究の成果

(1) 体験を探る

○目に見える形として、同じように見られる遊びや子どもの姿でも、一人一人の内面により、それぞれの体験の意味の違いをもっていることが、わかりました。

○体験と体験のつながり

・子どもの生活・遊びの過程
・体験の多様性
・人との関係づくり



・育ちの過程の見とりの重要性
・援助の多様性
・人間関係の発達と育ち

(2) 教師の援助について

○保育記録と保育カンファレンスにおける視点を明らかにした教師自身の保育・援助の振り返りが体験の意味の見取り、援助の改善、環境の再構成につながることを再認識しました。

○子どもの育ちの過程の「今」を「過去」とつなげて、「未来」をつないで、考えていくことが、生活を支えるためのつながりをさらに探究する大切を見出しました。



シンポジウム ～参会者の協議の様子～

提案事例をもとに、「体験」の意味について、それぞれの考えを出し合って、交流を行いました。「何を」とらえるか、「どのように」見つめるのか、子ども同士の関係性のつながりをどう考えるか、話し合う中で、子どもを主体として「体験」をとらえ直すこと、自分のとらえについて振り返る大切さを見出すことができました。

シンポジウム ～パネリストの話から～

子どもの姿を見つめるとき、共有する記録や写真等から、多様な、その教師自身の見取りがあることが大切です。「同じ」ではない多様性を伝え合う中で、子どもの「体験」の多様性、つながりを見出すことができるのです。心情・行動の内は、見えないものだからこそ、いろいろと心をともに動かして感じ考えることを大切にしていきたいと思います。



講演「出来事をともにつくる保育

～どの子もテーマをもって生きている～

北海道大学大学院教育学研究院 准教授

川田 学 先生

「生きることで生かす」

子どもの生活を支えるのは、人・もの・ことを含む環境です。よりよく生きようとする思いや行動を大切にしていくこと、大人がそうした姿を見せていくこと、つまり、生きることで生かすことです。じっくりと花を咲かせる「アメフリボタン」(北海道産)に例え、種を撒き、水や光や栄養を適切に与えながら、待つ大事さを伝えられました。

「関与することにつながる」～お互いさまの関係～

自分と相手をつなぎ合わせていく行動は、子どもの自発性から生まれています。つなぐ中で、他者を自分のこことして、感じていくことになります。そのとき、自己の成長にもつながるのです。

「あたためることで生える」

どの子の自分のテーマをもって生きている、支えているのは自分を揺り動かす感情(心)であり、それらの表れが行動として見えてきます。言葉にならなくとも、じっくりとあたためている姿のみられる幼児期の子どもの姿を見取っていきたくて願います。

川田先生には、子どもの思いを代弁されているかのように感じ考えさせるお話が多く、今後の保育に生かしたいと強く後押しされました。